日本山岳會富山支部會報
昭和２３年　　棟方志功

No.111

2019 年 6 月 18 日

公益社団法人日本山岳会富山支部

第 34 回　播　隆　祭

期　日：令和元年 6 月 2 日（日）

場　所：富山市河内（旧越中国新川郡河内村　播隆上人の出身地）　播隆上人顕頌碑前

参加者：生家の会 9 名、一般参加 6 名、富山支部会員 19 名

第 34 回播隆祭が開催された。播隆祭は 36 年前に始まったが、土砂崩れのため 2 年間開催できなかった。まず、鍛冶富山支部長から「播隆上人を後世に伝えていきたい。」と、挨拶があった。続いて、生家の会代表の大作さんから挨拶があり、参加者全員が焼香をした後、大作さんから展示した中村家所蔵の上人ゆかりの品の紹介があった。

鈴：播隆上人が河内の念仏道場に寄進したもの。葵の紋が付いていて、差し渡し 20 ㎝はある。

肖像画：上人 49 歳頃と言われる掛絵。54 歳で亡くなったとされているので、晩年の穏やかな表情の肖像である。

迦多賀獄再興記：笠ヶ岳山頂で阿弥陀如来の出現に登山者一行が歓喜の涙を流して喜んだという記載がある。播隆筆。上宝・本覚寺に現存するものの複写。

金尾会員から、播隆上人が槍ヶ岳開山の前に再興した笠ヶ岳旧登拝道の調査報告があった。記念撮影の後しばらく直会で談話し、生家の会の長老からお話を伺い 1 時間ほどで終了した。 富山新聞の取材があって、6 月 3 日に掲載された。　　（正橋立子 記）

目　　次

第34回播隆祭……正橋立子 1
高頭山記念登山……北田幹夫 2
高頭山登山道整備……北田幹夫 3
赤祖父山と福寿草……松本睦男 3
新緑の牛岳……北田幹夫 4
尾瀬ヶ原散策……正橋立子 5
第35回全国支部懇談会に出席して……河合義則 7
全国支部懇談会に参加して……石原ゆかり・吉井一美 7
剱岳山開き……鍛冶哲郎 8
唐堀山……本郷潤一 8
蓮如上人御影道中(1)……金尾誠一 9
新入会員紹介…… 12
会員動向、山行計画等案内…… 12
編集後記……正橋立子 12

高頭山（1,210m）記念登山

期日：2019 年 6 月 2 日（日）

参加者：本郷、渋谷、山田、近藤、森田、宮崎、瀬川、正橋、浦井（直）、浦井（正）、金井、北田、その他一般参加（川端、山村、沙美、高田、新坂）

播隆祭を終え登山口に向かう。駐車場が一杯で手間取るものの、何とかスペースを見つけて 17 名で出発。2 週間前に登山道整備を行ったが、その後も手入れした跡があり、快適に歩く。浦井会員は今回もチェーンソー持参で参加し、前回残した倒木等を処理する。杉林を過ぎるとサワフタギ、ヤマツツジ、足元にフタリシズカの可憐な花が咲く。途中の登山道沿いでは期待どおりアサギマダラが舞いタニウツギが咲く。三枚滝への分岐地点で小休止し、三枚滝を見て下山する近藤会員と別れる。ここからしばらくは急登となるが、故有沢会員が杭を打って整備をした跡があり、その後再び崩れかけている箇所も発生している。やがてシャクナゲの繁る展望台（約 960m 地点）に到着。しかし既に花は終わって葉のみ。ここから先は快適なブナの樹林帯を深呼吸しながら進む。途中、晴れていれば大日岳の向こうに剱岳が望める地点（約 1,120m）、同じく立山が望める地点（約 1,190m）を過ぎるが、今日は雲の中。ブナの新緑を満喫して頂上に到着。頂上には 2 週間前に立て直した高頭山の標柱が無事立っており、これを囲んで記念撮影して下山。帰路、シャクナゲの繁る展望台はきれいに整備され、常願寺川方向の展望が開けていて驚く。また、アサギマダラ 4 頭の飛翔を確認し、ヨツバヒヨドリの葉で羽を休める 1 頭を撮影する。

なお、今回は国土地理院から貸与された GPS 機器 3 台を 4 名で分担して往復した。これは正確な登山道を地形図に反映させる調査活動の一環で当支部では昨年 12 月に祖父岳で実施し（支部会報 No. 110）、今回が 2 座目となった。後日、会員が歩いたコースを読み取り、正確な登山道として順次改定される地形図に反映される予定。

全員の下山を確認して解散する。　　（北田幹夫　記）

［コースタイム］10：30 登山口--11:30 三枚滝への分岐-12：25 シャクナゲの展望台--13：40　頂上 14：00 下山--15：00 三枚滝への分岐--15：55 登山口

高頭山登山道整備

期日：2019 年 5 月 19 日（日）

参加者：鍛冶、渋谷、本郷、木戸、松本、森田、浦井（直）、浦井（正）、金井、北田

6 月 2 日の播隆祭を前に恒例の登山道整備を行った。昨年頂上に設置した標柱が倒れているとの情報があり、修復のためにスコップ、セメント、針金等を持ち、草刈り、枝払い、倒木の処理をしながらの登山となる。アサギマダラの飛翔は少なかったが、頂上手前のブナの林でギフチョウが舞い、シャクナゲ、ユキツバキ等が咲く。頂上の標柱は熊にかじられ細くなっていたものの、ネームプレートは無事だったので、30 分ほどで立て直し、記念撮影して下山とする。（北田幹夫　記）

［コースタイム］7：30 木戸自工集合--8：45 登山口--10：35 三枚滝への分岐--13：40　頂上 14：30 下山--15：40 三枚滝への分岐--16：20～40 登山口

赤祖父山(1,033m)と福寿草

期日：平成 31 年 3 月 27 日（水）

参加者：近藤、松本、山田、本郷、渋谷

雪が解け、天気を見計らって福寿草を訪ねて赤祖父山へ行こうという話があり、天気予報を見て予定した日より 1 日早く出かけた。南砺市井口のゆ～ゆうランド・花椿の駐車場に集合、車を乗り合わせ、林道大野線から赤祖父山の旧登山口へ。ここには、富山県指定天然記念物となっている梆谷の福寿草自生地の説明と見学者への注意看板が建てられている。県内の福寿草の自生地はここと大沢野にあるとのこと。ここで車を駐車、準備をしていると車 5 台が到着、元気そうな女性の一団であった。後で聞いたら富山ハイキングクラブとのこと。

我々は先に出発、15 分程で福寿草の群生地に到着、まだ朝が早く陽が注いでいないので蕾は萎んだままであったが、帰りには黄色の花びらがきれいに開いていた。

登山道のすぐ脇に咲いており、上部に向かって群生している。一時期、乱獲され荒れたということで地元の方が保護に尽力された賜であろう。幸福と長寿から福寿草といわれており、旧正月の元日近くに咲いたので元日草とも言われている。正月には南天と共に寄せ植えし、「災い転じて福となす」とめでたい正月の飾りになっている。根には多くの有毒成分が含まれており、 強心剤や利尿剤として利用されているようであるが、毒草である。

赤祖父山へは旧道であるので登山道は整備されていないが踏み跡があり、尾根に出るまで残雪もなく歩きやすい。尾根に出てから残雪を踏んで、左手に砺波平野の散居村を眺めながら進むと林道に出る。ここから急登が扇山まで続く。杉の植林地を過ぎるとブナ原生林となるが、杉林は井口村史によると大正 14 年以後、分収造林として植林したもので、今は砺波地域の森林組合が管理している。杉とブナの植生境界線がよくわかり、ブナ林は水源の「水持ち林」として伐採を禁止して水源涵養保安林となっているようすがわかる。積雪はまだ２m近くあるように思われる。頂上の赤祖父山の標柱が雪の下であった。遠く白山や近くの高清水山、高落場山、人形山などの眺望を楽しむ。段々風が強くなり、寒いので、そそくさと退散、風を避けて昼食を取り、下山する。高清水山から八乙女山間は高清水山地と言われ、戦国時代の城砦群の地形の特徴を見るのも楽しめる山であるがまだ、雪の下である。赤祖父山一帯にはユキツバキが群生しているそうだが、花があるのは一輪しか目に入らなかった。雪割草もほんの少し花を見せていた。帰りは温泉で一汗流そうと花椿へ、水曜日が休館日、風呂に入れず残念、でも穏やかな春の一日でした。　（松本睦男　記）

新緑の牛岳（987m）

期日：2019 年 5 月 7 日（火）

参加者：渋谷、近藤、木戸、松本、北田、嶋田（会員外）

渋谷、近藤会員から「新緑の牛岳に登らないか」との誘いがあり参加。庄川水記念公園に集合して小牧ダムの先から林道へ入る。10 連休明けの平日ということもあり、登山者は少ない。

登山口には牛嶽ふるさと歩道の案内板があり、しばらくは杉林を進む。エンレイソウやヨシナ、ゼンマイ等の山菜が目に入る。20 分ほどで旧牛岳ヒュッテの小屋跡に到着し小休止する。少し登ると明るく快適な広葉樹帯に入り、ショウジョウバカマやユキツバキ、ツツジが目を癒してくれる。30 分ほどで 6 合目に到着。ここは旧トラバース道との分岐点で視界が開ける。現在トラバース道は通行不能とのことで新たに整備された稜線コースに向かう。しばらくはロープを張った箇所もあり急登となるものの、まもなく快適な稜線歩きで気持ちの良い風が吹く。新 7 合目は南側に白山、五箇山の山並み、北側に砺波平野の展望が広がる別天地。その後、タムシバが咲き、時折北側に雪が残る登山道を進むと 987m の三角点がある山頂に到着。ここからは雲の間に北アルプスの山並みが望め、富山湾から白山まで 360 度の展望が広がる。記念撮影後しばらく進んで祠のあるもう一つの頂上で昼食をとる。ここからは北側へ下山。しばらくは登山道に雪が残る。途中見事に萌えるブナ林が広がり、写真をとりながら二本杉へと下る。ここから三段の滝へと急な坂を下り、牛岳トンネルの入り口にあたる地点で林道と合流する。

林道沿いの山菜を眺めながら登山口の駐車地点に戻り帰路へ車を進めたところ、国道 471 号の道路工事で 15 時 30 分まで通行止めとの案内。仕方なく引き返し、山田村経由で砺波へ。なんとか庄川水記念公園に戻るというおまけがついた。　　（北田幹夫　記）

［コースタイム］8：20 庄川水記念公園発、小牧より林道へ--8：50 登山口--9：10 小屋跡--9：50 6 合目（旧トラバース道との分岐点）--10：30　新 7 合目--11：00 牛岳三角点頂上--11:30 牛岳（祠）12:05 下山--12:45 二本杉--13：20 三段ノ滝--13:30 林道合流--14:00 登山口駐車地点--14:20 林道に引き返す--15:20 庄川水記念公園

尾瀬ヶ原散策

期日：令和元年 5 月 14～15 日

参加者：正橋、非会員 3 名

尾瀬へは 5 回目。1 回目は、ゴールデンウイーク中に、見渡す限り雪に覆われた雪原を歩いた。2 回目は、9 月中旬で、すっかり草紅葉で至仏山に登った。3 回目は 8 月上旬、この時もすでに花も葉も枯れていた。4 回目は、9 月下旬にコースを変えて尾瀬沼から入った。燧ヶ岳から見下ろした紅葉の尾瀬ヶ原が美しかった。4 回行ったが、まだ花を見ていないので、水芭蕉を期待して出かけた 5 月の尾瀬散策についてお伝えする。

☆下調べ：宿泊先の山小屋へ雪の状態を確認する。今年は、4 月に入って 1 メートルもの積雪があって、まだ雪が残っていることが分かった。5 月は、まだ休業中の山小屋があるので確認が必要だ。

☆アクセス：北陸自動車道―関越自動車道 沼田 IC―尾瀬戸倉バス連絡所―鳩待峠

シーズン中は、尾瀬戸倉から自家用車乗り入れ禁止なので、鳩待峠行のバスに乗り換えるが、5 月中旬（今年は 18 日から規制）までは、鳩待峠まで車で行ける。バスの本数は 1 時間 1 本のペースなので小一時間は節約できる。富山から片道 360 ㎞で、時間はかかるがルートは簡単で迷うところはない。

☆5 月の見どころ：「湿原を歩かない」のが、尾瀬の三原則の一つだが、5 月は、木道の上の雪が空洞化していて、雪を踏み抜き湿原の水に足を突っ込んで危ないし、時間もかかる。夏では歩けない湿原の上にある踏み跡をたどった。

雪が少ない年は、5 月中旬から湿原一面の水芭蕉が楽しめるが、今年は、木道付近にちらほら咲き始めたところだった。

水芭蕉とリュウキンカ

湿原の凹凸

竜宮の伏流点

花が咲きだす前に見られるのが、植物が枯れて泥炭となって積み重なった湿原の様子だ。上田代（尾瀬では湿原を田代と呼ぶ）付近で特に凹部（シュレンケ）と凸部（ブルト）が見て取れ、解けかけた雪原にも凹凸が見られる。

また、雪解け水が多いときによくわかるのが、「竜宮」だ。尾瀬ヶ原には流れ込む川があるのに出口のない池や、逆に出口しかない池がたくさんあるが、水があふれたり枯れたりしないのは、池が地下のパイプでつながっているからで、地元の人たちは、この不思議な現象を竜宮城につながっているからと考えて、「竜宮」と呼んでいる。竜宮の十字路付近で、それより下流に水が流れていない伏流点と水が渦を巻いて湧き出ている湧出点がよくわかる。

☆おすすめポイント：平日だったこともあるが、人がいない。‘山の鼻’で、“山開き”が行われていてお手製の甘酒をごちそうになった。中田代で昼食をとった後、下田代まで他に人影はなかった。ガスのかかった幻想的な尾瀬の写真をゆっくり撮れる。

☆装備の注意点：雪に覆われた木道の縁がわかりにくくて、雪を踏み抜いて湿原の水に足を突っ込むことがある。そこで、鋲付きの長靴とストックがお勧めだ。

７月上旬に‘三条の滝’へ行くための下見だったが、融雪期は、立ち入り禁止の掲示が出ていたので無理せず引き返した。次は、花の盛りが楽しみだ。

☆コースタイム：同行者が写真撮影に時間をとり、雪が残った木道を歩くのは時間がかかるので、参考まで。　（正橋立子　記）

１日目：鳩待峠 10:30－山の鼻 11:30－中田代　12:30(昼食)－竜宮 13:30－下田代（見晴）14:15－桧枝岐小屋 泊

２日目：見晴 6:30－鳩待峠 11:00

第 35 回全国支部懇談会に出席して

期　日：令和元年 5 月 25～26 日

参加者：木戸、鍛冶、渋谷、河合、菅田、米谷、石原、吉井

奥日光・光徳で開催された、日本山岳会全国支部懇談会に富山支部から鍛治支部長他 7 名の会員で出席してきました。総勢 160 名の会員の出席でお世話いただいた栃木支部の皆様に感謝申し上げます。栃木支部の渡邉支部長は以前に立山町の国立登山研修所の所長をされており、楽しみに参加させてもらいました。日光は東照宮、華厳の滝、男体山等の有名な観光地ですが、私の若いころはフライフィッシングの日本での発祥地とか、戦場ヶ原のクロスカントリースキーの盛んな場所という印象が強く、ゆっくり散策してみたい魅力的なフィールドという印象です。

2 年前の筑波山での全国支部懇談会の時から準備されてきたということで、奥日光の自然に触れてすばらしい時間を過ごすことができました。記念講演は「近代登山とアーネスト・サトウ父子の日光への山旅」と題して栃木県職員 OB の飯野達央氏による興味深い内容で、明治時代より軽井沢と日光が欧米人の避暑地として栄えていたことや新たな文化の移入もあった事などを再確認しました。アーネスト・サトウはいろいろな分野に名がでてくる、多才な人という印象でしたが本業は通訳であったことを今回知ることができました。明治 11 年には長野県大町市から富山市への横断山行も行っています。

講演会の後は、日光自然博物館を見学して今日の宿である「日光アストリアホテル」に移動しました。160 名の懇親会は圧巻でした。皆さん元気です。戦場ヶ原にある一軒宿のこの施設は周辺の環境と調和した趣のある宿でした。　　(河合義則　記)

全国支部懇談会に参加して

今回は開催場所が奥日光ということで、観光で通り過ぎたことしかなく是非訪れてみたいと思い参加させていただきました。関越道の沼田 IC から群馬～栃木へと、目の前に大きな山容をみせてくれたのは「男体山」。現地での二日間、晴れ渡った景色の中で堂々とした姿が印象的で、未踏の山への期待が膨らみました。

さて、一日目の受付後記念講演を聴き、ホテルへの移動前に「華厳の滝」を見学。
夜は全国から集まった多くの会員の方々と懇親会での談話。当日は大相撲で「朝乃山」の優勝決定ということもあり、富山がより一層誇りに感じた宴となりました。

翌二日目は、登山コースへ参加。総勢 100 名を超える参加者が 2 班に別れ、宿泊ホテルをバスで出発。「湯元～切込湖・刈込湖～光徳牧場」を巡るハイキングコースです。所用時間は昼食時間込みで約 7 時間でしたが、実際のところ 6 時間で到着。どちらかというと平均年齢が高めとは感じつつ、実際歩いてみると参加者の皆さんの歩きの速さにただただ驚愕させられました。途中休憩の時には地層について参加者のメンバーの中にその方面に詳しい方がいた事も有り、現地の断層を見ながらその成り立ちについて教えていただいたりと、その見識の深さに尊敬の念を抱きつつもユーモア溢れる会話に引き込まれ、楽しいひと時を過ごしました。現地の自然の成り立ち

と山歩きの楽しさを十二分に楽しめ、また次回も参加したいという思いで今回の懇談会を終えると共に、自分自身まだまだ研鑽を重ね、いつかは県外からの方々を余裕を持って迎えることが出来るようになりたいと感じた二日間でした。　（石原ゆかり　記）

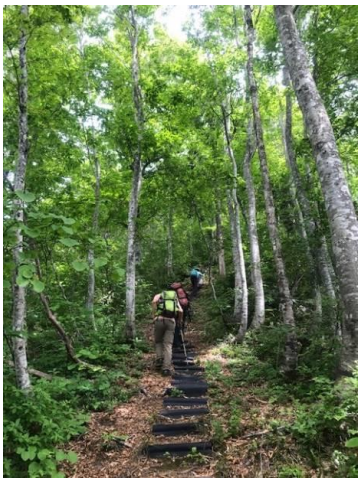
二日目の観光コースで飯野達央氏のレクチャーを受けながらイタリア大使館別荘、英国大使館別荘記念公園を見学してきました。イタリアの方は杉皮での外装や内装が特徴で食堂にはオールドノリタケの食器が並んでいました。昭和３年に建てられ平成９年まで使用されたとのことです。英国の方は外観が黒く内部は白を基調として明るく英国の伝統が感じられました。アーネスト・サトウが明治 29 年に建て、その後平成 20 年まで使用されたとのこと。両大使館別荘の広縁から見える新緑の中禅寺湖とその向こうの山々に英気をもらいました。　（吉井一美　記）

剱　岳　山　開　き

毎年６月１日に行われている剱岳山開きが今年も馬場島で開催され、富山支部から鍛治が出席した。剱岳鎮魂の社の前で行われた安全祈願祭鎮魂祭には、上市町長、役場、町議会、警察、消防、山小屋などの地元関係者をはじめ、国、県、県警本部などの安全登山・遭難対策に関わる行政機関、富山県山岳連盟会長、立山町長、遭難者の遺族の方々など多くの人が参加し、神前に安全登山を祈願し剱岳に眠る御霊に祈りを捧げた。神事の後、主催者を代表して上市町観光協会長と上市町長が挨拶をして閉式となり、余興として早月小屋の佐伯謙一氏が「剱の歌」で美声を披露、主催者と賓客によるテープカットで剱岳の登山シーズンが始まった。最後に参加者におにぎりと豚汁が振る舞われ、散会した。

当日、山開きのイベントとして、式典と並行して中山登山が行われた。土曜日で好天にも恵まれ、（岳連会長として山開きに出席し、式典終了後に中山に登った山田前支部長によれば）多くの人が中山登山を楽しんだということであるが、やはり山開きの後に早月尾根の 1,200m あたりまで登った私は誰にも会わなかった。　（鍛治哲郎　記）

唐堀山（1,159m）



期日：2019 年６月５日（水）
参加者：近藤、山田、渋谷、菅田、北田、本郷

神通川第２ダム駐車場にて山田車、北田車に分乗。国道 41 号より国道 360 号線に入り宮川方面に向う。加賀沢トンネル手前の路肩には、すでに１台が駐車。天気は快晴、暑い一日になりそう。宮川に架かる橋を渡り、トンネルに入って 560m 程の非常口より外へ出る。はしごを降り登山開始。

今回は3年前の夏に亡くなった山岸和子会員を偲ぶ山行企画でもあり、彼女がよく来ただろうこの地で各々彼女との思い出を語らいながら足を運ぶが、登り一辺倒の急な登山道に苦戦。途中、富山山想会の男性と若い女性2人の3人連れに越されながらも第一鉄塔にたどり着く。前回、彼女らと来た時、この辺りは一面にワラビがあった気がするが今回は数が少ない。それでも、第二鉄塔を過ぎ、第三鉄塔へと登ると、第四鉄塔手前では一変してワラビ畑？。今までの疲れも忘れて収穫に夢中。その喜びと共に第四鉄塔、頂上三角点を通過しヘリポートに到着。既に、富山山想会の3人、双嶺山の会の4人組、他1名の活動あり。まずは、渋谷会員が持参した在りし日の写真等を前に渋谷導師による般若心経。いよいよ、今回一番のススタケ採取へ。先着8名の後でも満足のいく手ごたえで、山岸さんと自然の恵みに感謝、感激。今回、ヒトリシズカ、フモトスミレ、ナルコユリ、ウリノキの後押しで終えた一日であった。　　（本郷潤一　記）

［コースタイム］7：20加賀沢トンネル手前−7：40登山口−−11：10三角点−−11：20ヘリポート12：40下山−−15：10登山口−−15：30加賀沢トンネル

蓮如上人御影道中（1）

1 はじめに

御影道中という行事があることを知ったのは、真宗大谷派（東本願寺）発行の「同朋新聞」からであった。これまで日本百名山、四国歩き遍路を行ってきたので、吉崎から京都まで歩くというこの行事に興味を抱いた。そして平成30年の御上洛に初参加した。前々日に叔母さんの葬儀があり、この日が少し遅れていたら実現できなかった。つくづく参加できるご縁があったと感謝している。

2 御影道中とは

毎年4月17日から23日と、5月2日から9日までのそれぞれ一週間にわたって行われる「蓮如上人御影道中」は、吉崎別院（福井県）で務められる「蓮如上人御忌法要」にあわせて行われる。1475年（文明7年）、およそ7年間の北陸教化の末に吉崎を去った蓮如上人は、別れを惜しむ人々に形見の御影を残したと伝えられる。形見の御影は江戸時代中期、内紛を生じた吉崎から真宗本廟へと預けられた。以来、御影は琵琶湖西岸を通って吉崎に「下向」し、御忌法要を終えた後、湖東回りで京都に「上洛」する習いとなった。その始まりは、1673年（寛文13）であると伝えられており、今年2019年（令和元年）で346回目を迎える。御影道中は、上人が歩まれた京都と吉崎を

結ぶ道程を、現在も随行教導や宰領（責任者）、数名の供奉人（世話役）と共に各地の会所で仏法聴聞しながら、上人の御影と共に往復 520km（御下向 240km・御上洛 280km）を歩く伝統的な仏事である。（南御堂第 647 号、2016 年 5 月 1 日より引用）

3 平成 30 年「御上洛」に初参加

午前 7 時 30 分出発なので、前日吉崎別院に宿泊した。同じく宿泊されていたのは、「教導」、「宰領」、「供奉人」と呼ばれるお役の方々。これらの方は吉崎別院から依頼を受けてお役につかれる。その他に自分の意志で参加された自主参加の方々であった。この中には私を含めて完歩を目指される方 7 名、ある区間を区切って参加される方数名がおられた。その他には越前大野から来たというお婆さん二人がおられたが、翌朝のお見送りをする為ということだった。

早朝、出発式があり道中開始。ロープでお輿を引く一行の一員となる。一行の 50m から 100m 先にマイク係の人が「蓮如上人様のお通りー」と大きな声で触れていく。参加者はそれに続いて同じく「蓮如上人様のお通りー」と声を上げる。沿道にはお輿（蓮如さま）をお見送りしようとする人が家の前や道路脇に出ておられる。ご一家ぐるみであるいはご夫婦でまたお一人で合掌して出迎えられる。

そしてお花や御懇志を出される。一行は進路に従って先々で「会所」と呼ばれる寺院や一般家庭に立ち寄る。その到着時間は予め決められており総責任者である宰領さんは厳守すべく必死である。会所では御影の入った櫃を中に入れ、その前でお勤めと法話が行われる。それが終わればまた櫃をお輿に戻し次の会所に向かう。これを繰り返していくというのが道中の内容であった。会所で教導先生の法話が長くなると、次の会所に時間通りに着く為には大急ぎでスピードを上げなければならないという次第となる。

会所では予定時間に合わせて諸準備万端整えられ、そこに近所の人々も集まってこられるのだ。

会所ではこの道中にあわせて色々と準備されていることが窺えた。中には現在その家で生活していないにもかかわらずこの行事に合わせて帰って準備されているお宅もあるということであった。先祖代々家のお勤めとして続けておられるという尊いお気持ちには頭が下がるばかりであった。

蓮如上人御影道中の経路と日程

（東本願寺発行のパンフより引用）

「蓮如上人様お通りー」の一行が行く

会所ではお茶などをはじめ飲物、お菓子、餅や果物、その土地の特産物などを用意してくださっていた。また手作りのお昼ご飯もおいしく頂く。宿泊は寺院 4 箇所、公共施設 2 箇所、民泊 1 箇所であった。歩いている時は、自分の荷物は伴走の車に運んでもらえた。考えてみると道中の間は生活に関するいっさいは準備してもらい、極端にいえばお輿のロープを持つことに専念してさえいれば良いということであった。

一日目、夕方から雨となり雨具、ゴム長靴を使用。20 時頃、福井別院に到着する。一日目としてはかなり負担となる行程であった。部屋の中に新聞紙を広げ雨具、シューズを乾かした。

翌朝からシューズに替えてクロックスのスリッパにした。いつかの四国遍路の時、シューズの中で足が膨れ困ったことがあった。それでシューズはブカブカ状態にすることにしていたのだが、全く締め付けの無いスリッパでどうかと思い試してみた。結果的には何の支障もなかった。以後最後までこのスタイルにした。いまは四六時中このスリッパを愛用している。考えてみれば昔の人は皆草鞋だった。播隆さんも険しい山でも草鞋だったであろう。ならば現代の草鞋としてスリッパでもよいのでないか。峠越えの山道もこの通りにしたが、とにかく自分にとっては支障ないということは確認できた。

三日目だったろうか、宰領から「あなたがロープの先頭になってほしい」言われた。了承して先頭で引く。そのうち近くから「ロープがたるんでいる。」、「もっと先にいって。」等お仲間からの声。供奉人から言われたのであればわかるのだが、同じ参加者の声にがっかりした。

山道では背負子で櫃をかつぐ

おそらくこの道中を何度も経験された方なのだろうと想像した。JR 湯尾駅で小休止する。そこに福井支部の加賀さんの姿があった。ここから湯尾峠を越えて次の会所まで歩くということであった。思いがけない方との出会いであった。湯尾峠まではお輿が通れず、人が櫃を背負子で担いでいくことになる。加賀さんのお目当てもそれであった。

峠を越えた先の今庄は会社務めしていた頃よく来たところであった。会社の研究所に在籍して冬の雷の研究を担当していた。新たに作る 275KV 送電線の設計資料を得るための観測調査に通ったのであった。この時は国道を通るばかりで北国街道といわれる旧道や今庄の宿場には全く縁がなかった。ここにきて昔ながらの宿場の佇まいが残っている様子がすっかり気に入った。この日自主参加者は「今庄サイクリングセンター」に宿泊した。ここで雑談の中、お西の布教使をしておられる A 女史から説教についての苦言を聞く。曰く「お東は時間厳守がなっていない。話の内容も暗い。人は阿弥陀様のことを聞きに来ているのにそれがない。」と非常にハッキリ言われた。強烈な印象を残して翌日は帰って行かれた。（次号に続く）　　（金尾誠一　記）

☆新入会員紹介：柳澤義光（やなぎさわよしみつ）（49）（現・富山県警山岳警備隊 隊長）

３月入会　会員番号:16458　上市町法音寺

自己紹介：この度、新規入会させていただきました。思い返せば 30 年前、東京の大学に通っていた頃に、所属していた山岳部が日本山岳会学生部に加盟していたので、大学から近かった市ヶ谷のルームによく通っていました。その縁で、大蔵喜福さんのマッキンリー（現デナリ）気象観測隊に参加させていただき、登頂を果たすこともできました。現在は山に関する仕事をしておりますが、何かと多忙で個人で登山に行く時間をなかなか持てないでいます。老後に備えて登山を楽しむ時間を少しでも持てるようにしていきたいと考えておりますので、諸先輩方にはご指導の程よろしくお願いいたします。

☆会員動向

・川田邦夫会員　NPO 法人富山県自然保護協会の総会が 4 月 23 日に富山市で開催され新理事長に就任されました。

☆山行計画等案内

・自然保護全国集会　7 月 6～7 日(埼玉支部)
・支部例会と暑気払い　8 月上旬　（別途案内します）

山行計画

月　日	山　行　内　容	集合場所・時間	申込み先	締切り
7 月 13～14 日	出羽三山の旅		渋谷	6/22
9 月　8~10 日	光岳・南限の雷鳥と出会う旅		本郷	8/10
9 月 16 日(祝)	「山の日」記念行事		事務局・河合、本郷	
10 月　5 日(土)	有澤さんを偲ぶ会・鉢伏山	7:30AM 立山町役場	本郷	
10 月 22 日(祝)	大鷲山偵察山行	8:00AM 朝日町役場	本郷	
11 月　9~10 日	五支部合同山行・大鷲山他		事務局・河合、本郷	
11 月 16~17 日	平村・梨谷川「美し谷遡行」		渋谷	

編　集　後　記

令和となって初めての会誌発行となりました。播隆祭・記念登山、登山道整備、例会山行、物故会員追善山行、個人山行の報告に加えて、新入会員の自己紹介を掲載いたしました。山つながりで、地元・富山県民としては、‘朝乃山’にひと言ふれずにはいられません。 優勝おめでとうございます。　（正橋立子　記）

公益社団法人日本山岳会　富山支部会報　第 111 号
発行者：鍛冶哲郎　　編集者：北田幹夫・正橋立子
事務局　〒939-8095 富山市大泉中町 7-52-204　河合義則方
電話　076-492-3936　　090-4326-6197　　E メール　kawa-mori55@air.ocn.ne.jp